

『ムハンマドのことば：ハディース』

小杉泰*編訳、岩波文庫、2019年

山 根 聡†

アブー・フライラは、アッラーの使徒が次のように言ったと伝えている——私はあなたたちの間に、それがあれば（それに従えば、あるいは、それによっておこなえば）決して踏み迷うことがない二つを残しました。アッラーの書〔クルアーン〕とわがスンナです。その二つは〔樂園の〕池で邂逅するまで決して分かれることがないでしょう。（ダーラクトニー、バイハキー）（392頁）

唯一神アッラーへの「絶対的帰依」を意味するイスラームが広まり始めたのは西暦610年頃、最後の預言者ムハンマドが40歳の時にマッカで啓示を受けてからのことである。ムハンマドには、啓典の啓示以外にもさまざまな知識や情報が天から与えられていたとされ、また彼の発言や行いには、宗教的な教えにかかわらないことや個人的判断に属する事柄もあった（小杉、2004:768頁）¹。冒頭にあるように、ムハンマドの時代にアッラーの言葉そのものであるクルアーンと預言者ムハンマドのスンナ（慣行）が残された²。このスンナを含む預言者の言行をまとめたものがハディースであり³、

* 立命館大学立命館アジア・日本研究機構教授

† 大阪大学大学院言語文化研究科教授
soyamane@lang.osaka-u.ac.jp

¹ 例えば、「アブー・フライラは、次のように預言者が言ったと伝えている——アッラーはおっしゃいました……」という、アッラーの言葉をムハンマドが伝えている様子を伝えるハディースの注では、「神がムハンマドに語ったことを意味するが、クルアーンが『神のことば』自体の啓示とされるのに対して、ハディースの場合は、神が語った意味をムハンマドが人間のことで表現しているとされる。つまり、『神の意図を伝えるムハンマドの語り』という意味で、ムハンマドのことばを指す『ハディース』の範疇に含まれる」（509頁）と説明を付している場合もある。

² ムハンマドが「私はクルアーンをもたらし、それと一緒に同様のもの〔預言者による指示・慣行〕をもたらししました」（391頁）と述べたうえで、クルアーンで決められたことだけをハラール〔合法〕とすればいいと主張する者が出てくるかもしれないが、「〔クルアーンで決められていなくとも〕家畜のロバの肉はあなたたちにとって合法でなく、牙を持つ禽獣も合法ではありません」とそれまでアラブで食されていたロバの肉を食することを禁じたり、落し物の取得を禁じるなど（391頁）、スンナがクルアーン同様守るべきものであることが示されている。

³ スンナとハディースの関係については、イマーム・シャーフィイーがイスラーム法学においてハディースを預言者のスンナと同定するのに対し、ハナフィー学者が区別するなど、法学者らによって異なる。本書（625–626頁）は、ハディースの一部を引用して預言者言行録としてのハディースと預言者慣行のスンナの相違を明示している。たとえば、当時食されていたトカゲの一種ダップをムハンマドはまずいということで手を付けなかった（229–232頁）という。訳注では、種々のハディースを参照して、「禁止はしていないが、食べることについては否定的なニュアンスを伴っている」（231頁）点などは、啓示ではなく、スンナであると考えられる。すなわち、ムスリムとしての確信とともに生きた預言者ムハンマドの個人的な見解が、スンナとして伝承されたのである。

本書は、ハディースの中から主だったものを簡明な日本語に翻訳したものである。

アッラーからの啓示であるクルアーンは概括的な命令が多いのに対し、その具体的な内容を補完したのがムハンマドの言行録である。ムハンマドの生前から彼の言行を伝える動きがあったが、それはムハンマドの死後にも数多く伝えられるようになった。これらの記録の中には、時代が下るとともに信憑性が問われるような語りも生まれ、のちにハディースの真偽を検証するハディース学が成立した。

9世紀ブハーラー出身のハディース学者ブハーリー（Abū ‘Abd Allāh Muḥammad ibn Ismā‘il al-Bukhārī, 810–70）が16年の歳月を費やして60万のハディースの中から信頼度の高い3700余の伝承を選んで編纂した『真正集 *Ṣaḥīḥ al-Bukhārī*』（佐藤，1997：167頁）は、スンナ派ハディース集の最高峰とされ、これまでに日本語訳も『ハディース イスラーム伝承集成』として刊行されている（牧野，1993–94）。また、ほぼ同時代のムスリム・イブン・ハッジヤージュ（Muslim ibn al-Ḥajjāj al-Qushayrī, 817/818–874/875?）による『真正集 *Ṣaḥīḥ Muslim*』もまた、ブハーリー版に次ぐハディースとして認められているが、その日本語訳もまた、『日訳サヒーフムスリム』（磯崎・飯森・小笠原，1987–89）として刊行されている。『ハディース イスラーム伝承集成』は2001年に中公文庫になったものの、『日訳サヒーフムスリム』同様、現在では入手困難となってしまう⁴。『ムハンマドのことは』は、これら『真正集』を含めた、8世紀から10世紀に編纂された16のハディースを典拠として⁵、ムハンマドの生涯とその時代、622年の聖遷後のマディーナでの暮らしと社会、そしてイスラームの教えの3つのテーマについて主だったハディースを選び、岩波文庫として一般向けに訳出したものである⁶。本書の編訳者は1980年代以降、わが国のイスラーム研究を牽引してきた研究者で、『岩波イスラーム辞典』（大塚ほか編，2004）のようなわが国におけるイスラーム研究の一大事業の主導メンバーを務めただけでなく、多くの研究書、論文を記してきた。さらに、クルアーンとムハンマドに関する概説書も記している（小杉，2002；2009）。簡明かつ的確な日本語で書かれた本書は、各ハディースの初めにはそのハディースの主題が、末尾にはそれぞれの出典が示されている。また読者のために、節などの初めに簡略な背景説明も加えられ、本文中には読者の理解を助けるために（ ）や []、「 」などで言葉が補われている。

⁴ 牧野の著作には『マホメット』（牧野，1979）もあるがこれも絶版となっている。同書は『ムハンマド——イスラームの源流をたずねて』（小杉，2002）同様、ムハンマドの生涯を描いた預言者伝（sīra；ウルドゥー語では sīrat）ともいえるもので、啓示部分は七五調の擬古文体で訳されている。

⁵ 本書はこれら16のハディースとともに、最も広く読まれているナワウィーによるハディース精選集を参考にしてしている。

⁶ 訳出にあたっては、ダマスカス大学でハディース学を修めたハシャン・アンマール氏の協力もあったとあとがきで記されている（700頁）。先行する翻訳の『ハディース イスラーム伝承集成』は『真正集』の翻訳であるため、たとえば、「食物」の項目においても、食事方法や様々な食物に関し詳細にわたる伝承が収載されている（牧野，1994：798–819頁）。これに比べて、本書には、その主だったものが収載されている（225–237頁）。ウルドゥー語でのハディースの選集の翻訳の場合、『真正集』そのものの翻訳の場合は『ハディース イスラーム伝承集成』（牧野，1993–94）の表紙にアラビア語で書かれているように、*Ṣaḥīḥ al-Bukhārī*と書名そのものとなっているが、選集等の場合は、本書同様、*Āp ne Farmāyā*（あの方がおっしゃった）、*Rasūl Allāh ne Farmāyā*（預言者がおっしゃった）といった題名となっている。南アジアでのハディースの英訳には1905年にベンガルのイスラーム学者アブドゥッラー・アル＝マームーン・アル＝スフラワルディー（1877–1935）によるものがある。京都大学アキール文庫には、このスフラワルディーによる英訳を英文タイプライターで打ち直した私家版が所蔵されている（Suhrawardī, 1944?）。なお、ペルシア語文化圏ではハディースをマスナヴィー体のペルシア詩に訳したものがあり、南アジアではそのウルドゥー語注釈が付されたものが刊行されている（‘Abd al-Laṭīf, 1975）。

本書は初心者から研究者までより多くの読者に読まれる書物として編纂されており、アッラーは平仮名で「かれ」と表現し、「彼」（ムハンマドなど）と区別する工夫がなされているほか、訳語の選択については、注によって説明が加えられている⁷。巻末にはハディースに登場する伝承者たちに関する情報や系譜、当時のアラビア半島の地図やムハンマドの略年譜が編訳者の解説とともに付されているほか、ハディースの歴史やハディース学の進展や意義について、ハディースを引用しながらの詳説があり、これを読めばハディースに関する基本的な情報が網羅的に把握できるようになっている。

本書では、現在世界に16億人の信徒を持つイスラームの最初期の様子について、最初の啓示の瞬間や、その後続く啓示の様相が生々しく伝えられている。

……ついに、ヒラーの洞窟に籠っている時に、真理が訪れました。天使が彼（ムハンマド）を訪れ、「読みなさい！」と言いました。彼は「私は読む者ではありません」と答えました。彼〔ムハンマド〕はこう語っています——すると、彼〔天使〕は私〔ムハンマド〕を捕らえ、私が力尽きるまで締めつけました。そして私を放つと、「読みなさい！」と言いました。私は「私は読む者ではありません」と答えました。すると、彼は再び私を捕らえ、私が力尽きるまで締めつけました。そして私を放つと、「読みなさい！」と言いました。私は「私は読む者ではありません」と答えました。すると、彼は三度目に私を捕らえ、私が力尽きるまで締めつけました。そして私を放つと、「読みなさい！創造なされたあなたの主の御名によって、かれは人間を凝血から創造なされた。読みなさい！あなたの主はもっとも尊いお方」〔凝血章 1-3 節〕と言いました。〔アーイシャは言いました。〕これを覚えて、アッラーの使徒は心臓が早鐘のように打つ中を家に戻りました。（42-43 頁）

アーイシャが伝えるところでは、ハーリス・イブン・ヒシャームがアッラーの使徒に次のように尋ねました——「アッラーの使徒よ、どのようにあなたに啓示が来るのでしょうか」。彼〔ムハンマド〕は答えました——時に、〔啓示は〕激しい鈴の音のように私にやってきます。これが私にとってもっとも厳しいものです。啓示として言われたことを私が知覚すると、それは終わります。時には、天使が人間の姿で現れ、私はそれを知覚します。（424 頁）

またある時、ムハンマドの前で議論が白熱していると、啓示が下され、預言者の前で大声を出すことが禁じられたことがあった（180 頁）。

このような啓示の体験のみならず、ムハンマドが天使と邂逅する場面も伝えられている。ムハンマドは塹壕の戦い（627 年）から戻って沐浴中にジブリールに会い、次に進むべき戦地を示してもらった（137 頁）り、ある時、ムハンマドとウマルが座っていると、真っ白な服を着た黒髪の見知らぬ男性がやってきて、ムハンマドにイスラームに関する質問をいくつか尋ねて去っていったが、こ

⁷ 例えば、財産（マール）という訳語について、「当時のアラビア語ではラクダを指すことが多い。しかし、注釈者たちによれば、伝承者のアブー・フライラが属するダウス支族（アズド部族系）の用法では衣服など現物のみを指すとされるので、このように訳した」（550 頁）と訳語の選択について説明している。「アラカ」という語についても、「凝血と解釈することが多いが、この語は『ぶら下がる』という動詞から派生するので、胎芽が子宮にぶら下がっている状態を指すとの解釈もある」（558 頁）といった解釈の問題も丁寧に示している。

の男性がジブリール（大天使）であったという（466–468頁）。このような体験をしながら啓示は積み重なり、やがてクルアーンの結果が始まった（425–427頁）のである。

こうした啓示に直接的に関わる伝承のみならず、本書からは人間ムハンマドの生涯が生き生きと伝わってくる。ムハンマドは中背で、亡くなるまで白髪がほとんどなく、気立てのいい男であった（210–211頁）。また染色された革のサンダルを履き（224頁）、歯磨きをすれば、吐き気があるような声を上げていた（212頁）という。説教中に、キリストが神の子として過剰に称えられていることを批判し、自分は「アッラーのしもべにして、かれ〔アッラー〕の使徒」にすぎない（421–422頁）⁸と述べた。多神教徒と区別するために顎鬚を伸ばし、鼻ひげを刈るよう命じているが（214頁）、これが現代のイスラム成人男性に共通するスタイルであり、スンナに基づいていることがわかる。ムハンマドはその顎鬚をサフランなどで黄色く染めていた（224頁）。裸で歩くことを禁じ（216頁）、金の指輪の着用や銀の器で飲むこと、絹の服を着ることを禁じ（217頁）、食事は近いところのものから右手で食べるように（225頁）勧め、香水をつけることを拒まなかった（242頁）。また、唯一神アッラーが「奇数者」であることから、〔拜前の清めを三回洗うなど〕何事も奇数で行うように薦める（520頁）など、さまざまなスンナが伝えられている。ナツメヤシや蜂蜜が好きだった（233–234頁）ことは、南アジアのイスラムがこれらを食するときによく口にする言葉である。ビザンツ皇帝に書簡を送るため、押印の目的で銀の指輪を造らせたが、それ以前に金の指輪をつけていた時は、周りの人々がそれを真似たが、ムハンマドが捨てると、皆捨てたという伝承（222頁）もある⁹。華美を戒めつつも、アッラーから施された財産を得たならば、その恩恵に感謝を示すためにも、きちんとした身なりをするように（219–220頁）といった伝承も残されている。また、孫のフサインとハサンを愛でていた（292頁）伝承など、ムハンマドの人間らしさがにじみ出ている部分も少なくない。あるとき、ムハンマドに忠誠を誓った人物が両親を置いてマディーナに移住しようとしたら、両親がそれを聞いて泣いていたという。ムハンマドはそれに対し、「両親のもとに戻り、二人を泣かせたように、〔今度は〕二人を笑わせてきてください」と命じた（357頁）。

こうした伝承の中に、啓示のくだりが出てくるものもある。第1代カリフ、アブー・バクルの娘でムハンマドの妻の一人であったアーイシャは、彼の最初の妻ハディースの死後に8歳で婚姻を結んだが、婚姻後、ムハンマドがハディースの話ばかりをすることによって嫉妬心を持ったこと（250頁）や、9人の妻たちの仲（259頁）などが詳しく語られているばかりでなく、アーイシャに対する中傷事件では、中傷を巡ってもめている最中に、アッラーが虚言を戒めたり、宥和を命じる啓示を行ったと伝えられている（266–283頁）。

六信五行（446–467頁）のほか、結婚の奨励（336頁）、結婚の儀式（338–339頁）、婚資金（341–342頁）、親孝行（349頁）、飲酒の禁止（365–366頁）、ハラールとハラールの区別（369–375頁）、利子を貪ることの禁止（379頁；412–413頁）、自殺や婚外性交の禁止（381–385頁）など¹⁰、規律が現代

⁸ また、天地創造や人類の誕生の様子（555–560頁）などについての記述は、全能なアッラーのわざを描き出している。

⁹ 聖遷後まもない628年にはマッカの指導者がビザンツ皇帝に謁見して、ムハンマドについての問答が行われたというくだり（151–159頁）は、イスラームの広がりや周辺地域にどれだけ浸透していたかがわかる。

¹⁰ 婚外性交を犯した人物がムハンマドのもとにやってくることを告白すると、ムハンマドはまずその顔を4回そむけ、それでも告白が4回続いたので、正気であったかななどの質問を経て罪深いと判断すると、石打の刑を命じた（384–386頁）とある。数回同じ行動を繰り返して確信を得ることは、預言者が一晩のうちにエルサレムに行った「夜の旅」、そこから昇天してアッラーと対話する「昇天の旅」（79–88頁）や離婚（357–358頁）などのハディー

のムスリムの生活に反映されていることがよくわかる。イスラームでは金曜の集団礼拝がクルアーンで命じられているが、預言者モスクで始まった集団礼拝が、他の地で始まったのは、バハレーンの町にあるアブドゥルカイスのモスクであったという（178-179頁）。また、礼拝の時刻の規定（480頁）¹¹やウドゥー [礼拝前の清め]、礼拝時の衣装（488頁）などについても、その方法について細かく規定されている。細かな規定というと、面倒な印象を受けてしまいがちであるが、クルアーンやハディースによって決まっているということは、むしろ楽な方法であるともいえよう。

一読すると、ほかの宗教にもありうるような「当たり前」の生き方を導いているように思えるが、イスラーム固有の価値観が含まれていることもある。当たりの生き方としては、たとえば、「自分に関わりのないことに関わらない」（431頁）ようにし、ねたみ合わず、売買において値を上げてはいけぬ、また互いに嫌い合ったり、背を向け合ってもいけない、嘘をついてはいけぬ（431, 436頁）とし、自殺や殺人を禁止（380-381頁）し、婚外性交の禁止（383-384頁）のほか、窃盗の定義（389頁）などを細かく定めている。その一方で、ムスリムの務めとして、「飢えている人に食を与え、病気の人を見舞い、捕虜となっている人を [身代金を払って] 解放してください」（430頁）のように、身代金による解放を説いている点は、十字軍遠征の時のルイ9世（1214-70）が捕虜となった時にも身代金によって解放された経緯を思い出させる。捕虜を不当に扱ったり殺害するのではなく、条件によって解放するのである。同様に、ムハンマドが話したこととして、ある男が、盗人、密通している女性、金持ちに喜捨をしてしまったと告白すると、誰かがやってきて、「盗人に対するあなたの喜捨で、その者は盗みをやめるかもしれません。密通している女性については、密通をやめるかもしれません。金持ちについては、[あなたの喜捨から] 学んで、アッラーが彼に下さった富から [善行に] 費やすかもしれません」と話した（505-506頁）と伝承されている。こうしたムスリムの前向きな発想は、日本人読者にとっては発想の転換を喚起するものである¹²。

ハディースに示された諸規定は、クルアーンにも示されている「公正」（409-410頁）を基準に定められており、その細かな規定によってイスラームにおいて法学が発達したことがうかがえる。イジュティハード（解釈）については、裁決者が採決を行った際に、自ら解釈の努力 [イジュティハード] をした場合、正答を得ていれば、彼には解釈の努力と正答の両方に対して二つの報奨が与えられるといい、解釈が間違っていた場合には、努力に対してだけの一つの報奨がある（392-393頁）として、正しいと思って努力した行為には報奨があるという積極的な評価が伝えられている。あるいは、貸借や債務の返済について、没後の清算が義務とされ、両替についても、後払いを禁じる（399, 408-409頁）など、現代にも通じる細かな規定が伝承されている。

生涯で19回の戦いに出陣し（186頁）、苦難を乗り越えながらムスリムの共同体形成の道を進んだムハンマドは、人々に最後の姿をモスクで見せ（203頁）、やがて最愛の妻アイシャのもとで亡くなった（205頁）。

編訳者があとがき（697-698頁）で記すように、原典研究の成果として、イスラームに関する原典の日本語訳が文庫版で刊行されていることは非常に喜ばしいことである。原典からの翻訳は、原典の一語一句の語義とその背景を理解せずにはなしえない作業である。しかも、ムスリムにとって重

スにおいても見られる。

¹¹ 礼拝時刻の規定は、同時に、礼拝禁止の刻限（491頁）や、日蝕や月蝕はアッラーの徴であることから、蝕の際の礼拝をすべきなども規定している（492頁）。

¹² 『イスラームを読む』（小杉、2016）においても、ムスリムの前向きな思考方法が紹介されている。

要な原典の一つであるハディースの翻訳という作業が、いかに労を要したかは想像に難くない。本書は、長年イスラーム研究を続けてきた編訳者渾身の訳業であり、ムスリムの信仰と価値観、着想の根幹を文庫で知ることができることは、日本人読者にとっては大きな財産である。「知る」ことに重きを置いたイスラームのあり方が今も息づいていることを、本書を通して理解できるであろう。

参照文献

- 磯崎定基・飯森嘉助・小笠原良治訳（1987-89）『日訳サヒーフムスリム』全三巻，日本サウディアラビア協会。
大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編（2004）『岩波イスラーム辞典』岩波書店。
小杉泰（2002）『ムハンマド：イスラームの源流をたずねて』Historia 1，山川出版社。
——（2004）「ハディース」，大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編『岩波イスラーム辞典』岩波書店。
——（2009）『クルアーン：語りかけるイスラーム』岩波書店。
——（2016）『イスラームを読む クルアーンと生きるムスリムたち』大修館書店。
佐藤次高（1997）『イスラーム世界の興隆』世界の歴史 8，中央公論社。
牧野信也（1979）『マホメット』人類の知的遺産 17，講談社。
——訳（1993-94）『ハディース イスラーム伝承集成』上・中・下，中央公論社。
Badi' al-Zamān, Muḥammad 'Abd al-Laṭīf (ed.), 1975, *Aḥādīth-i Mathnavī*, Lahore: Packages Limited（京都大学アキール文庫 C507）。
Suhrawardī, 'Abd Allāh al-Māmūn, 1944?, *Sayings of Muhammad*（私家版）（京都大学アキール文庫 D202）。